

ケラビット語バリオ方言の記述文法

要約

深谷 康佳

論文の目的と方法

本論文は、ケラビット語バリオ方言の文法記述を目的としている。ケラビット語バリオ方言は、オーストロネシア語族の西オーストロネシア語派に属する言語であり、マレーシアのボルネオ島、サラワク州北部のバリオ村に居住するケラビット人 (Kelabit) を中心に話されている。ケラビット人の人口は 5000~6000 人と言われているが、実際にケラビット語のみで生活を送れる流暢な話者は、65 歳以上のケラビット人に多い。若い世代は都市部に住み、マレーシア語や英語を話すようになり、ケラビット語を継承している若者は非常に珍しい。このような現状であるため、ケラビット語の消滅の危機を免れるには、一刻も早く語彙・文法・談話資料を揃え、ケラビット語を保存する必要がある。本論文では、ケラビット語が話されているバリオ村でのフィールドワークに基づき、ケラビット語バリオ方言の音韻体系、語類 (品詞) 体系、形態論、統語論という文法の全体像を記述した。本論文を書くにあたり、筆者は先行研究で挙げられている例のほかに、フィールドワークで収集したデータを用いて分析を行った。

本論文では、ケラビット語が話されているバリオ村でのフィールドワークに基づき、ケラビット語バリオ方言の音韻体系、語類 (品詞) 体系、形態論、統語論という文法の全体像を記述した。本論文を書くにあたり、筆者は先行研究で挙げられている例のほかに、フィールドワークで収集したデータを用いて分析を行った。

論文構成

本論文は 4 部構成であり、大まかな流れは以下の通りである。第 I 部 (第 1 章) は「概説」として言語の系統や使用状況、特徴について述べる。第 II 部 (第 2 章) は「音韻論」として、音韻体系を記述する。第 III 部 (第 3 章~5 章) は「形態論・語類」として、語と接辞・接語・小辞を分ける基準を明らかにし、語類 (品詞) の基準を設定する。そして、分類した語類ごとに、語類別形態論を記述する。第 IV 部 (第 6~7 章) は「統語論」として基本語順と構成素順序、そして単文が様々な文タイプにおいて、どのような構造を持つかを記述する。さらに付録として基礎語彙のリストと、フィールドワークの際に収集したエリシテーションの用例集を巻末に収録した。各章の詳細は以下の通りである。

第 I 部 概説

第 1 章 言語の概要

この章では、本論文が目指す理想の記述文法の特徴である内的一貫性・言語個別性について触れ、ケラビット語バリオ方言の地理的・系統的・文化的な特徴について述べている。先行研究や類型論的な特徴のまとめを行い、言語の記述の前提となるよう、ケラビット語バリオ方言の概要や背景について記述した。

第 II 部 音韻論

第 2 章 音韻体系

この章では、ケラビット語バリオ方言の音韻体系を記述した。16 の子音音素と 4 つの母音音素を認め、実現する音声の特徴や根拠となる最小対を示した。音響的な分析も行い、自らが設定した音素体系の妥当性を追求した。音節構造はオーストロネシア諸語の中でも典型的な (C)V(C) 音節を持つことや、強勢アクセントやイントネーションについても記述し、先行研究において存在するとされていた「有声帯気音」は、音響的特徴や音韻体系から「重子音」である可能性を示した。

第 III 部 形態論・語類

第 3 章 語

この章では、各言語で異なる基準を持つ語・小辞・接語・接辞の基準について述べ、形態論・統語論にまたがる単位を定義した。通言語的には形態的、または音韻的に自立するか否かで区別する事が多いが、ケラビット語バリオ方言の場合は必ずしも明確に自立しないし従属に分けられる訳ではない事について、音韻的特徴と形態統語的特徴に基づいて初めて論じた。

第 4 章 語類の基準

この章では、主要な語類として、語彙の数が多く、新しい語も作られやすい「開いた語類」である名詞・動詞と、オーストロネシア諸語の中では動詞の下位分類になる事もある形容詞を名詞や動詞と区別する基準について述べ、その他のケラビット語バリオ方言に認められる語類について簡単に導入を行った。

第 5 章 語類別形態論

この章では、第 4 章で立てた語類それぞれについて、用いられる形態的操作、特に接辞の付加と重複、複合について記述した。名詞語類では除括形 (clusivity) により人称代名詞が変化することや、動词语類では動詞の種類ごとに、ヴォイスとアスペクトにより付く接辞が異なっていること、副詞では、形態的にテンスを表さないため多くの時間副詞を用いていることなどを記述した。

第 IV 部 統語論

第 6 章 基本語順と構成素順序

この章では、基本語順や句や節を構成する構成素の順序について概観し、ケラビット語バリオ方言が SVO の基本語順をもち、主要部先行型の言語であることを示した。

第 7 章 単文の構成

この章では、単文を構成する際の重要な項目となる、格、TAM(時制・アスペクト・モダリティ)、ヴォイスに関わる単文の構造について記述した。さらに、項の数ごとの文タイプや、存在・コピュラなどの述語別の文タイプ、命令や否定など発話行為別の文タイプによる単文の構成についても幅広く記述を行った。形態的にはアスペクトのみを表示するが、語や小辞で時制、アスペクト、モダリティを示す方法が豊かでありそうなこと、コピュラは持たず、無動詞文になることや、否定文では文頭に否定辞 *na'am* を置く事が好まれる事などが明らかになった。